

教育統計はどのように解釈されてきたか

— 19世紀英国における統計協会の教育調査をめぐって —

上野 耕三郎

「統計の時代」 — 統計協会の教育調査

19世紀に入ると史上初めてと言っても過言ではない規模で統計が生みだされていった。「統計の時代」と言われるゆえんである。もちろんそれは好家的なものではなかった。大衆の肉体的・精神的状態についての知識が統治には不可欠なものであったからである¹。教育統計についてもこの例外ではなかった。1804年には「貧民状態改善協会」(the Society for Bettering the Condition of the Poor)が政府に対して全国調査を提案したのを皮切りに、いくつかの私的な調査が試みられた。他方では、公的な調査は1816年の「首都下層階層の教育に関する特別委員会」(the 1816 Select Committee on the Education of the Lower Orders of the Metropolis)と「製造所に雇用されている児童に関する特別委員会」(the Select Committee on Children Employed in Manufactories)の二つの委員会が、教育に関する委員会の先駆けとなり、この流れは1818年の「下層階層の教育に関する特別委員会」(the 1818 Select Committee on the Education of the Lower Orders)でひとまず頂点に達することになった。ブルーム(Henry Brougham)を長とするこの委員会は、教育についての全国調査を実施することを決定し、イングランド、スコットランドそしてウェールズのすべての教区牧師に回状を送付した。回答は要約され1819年には公表されたが、「用いられた資料が偏ったものであったので、回答の基礎は明瞭ではなく、照らし合わせるべき調査がなかったため、数値の正確さはかなり疑わしい²」とされている。結局のところ、教育調査が奔流となって流れ出てくるには、統計運動が本格的な教育調査を実

施するまで待たなければならなかった³。

ところで、統計協会を教育調査へと駆り立てたひとつの契機は、1833年の調査であった。ケリー伯爵 (Earl of Kerry) による動議が下院を通過して、それにもとづいて実施されたものである (The Select Committee on the State of Education)。調査は幼児学校、昼間学校、日曜学校の各学校数および生徒数に関してなされたが、明らかにその調査は多くの欠陥を抱えていた。教区民生委員 (overseers of the poor) が尖兵となって調査に当たったが、街路毎の調査を実施してはおらず、その結果、小規模な学校は調査の網の目からは漏れてしまった。また、昼間学校と日曜学校の両方に出席した生徒とどちらか一方の学校にのみ出席した生徒の区別がなされておらず、二重に数えられていたり、さらには、出席者数は登録者数から割り出されたのであろうが、通常の出席者数とはかなりな乖離がみられた⁴。これらの不備に対する強い不信感が広がっており、そのこともあって統計協会自体が自ら教育調査に乗り出すことになった。

マンチェスター統計協会はロンドン統計協会と双壁をなしていたが、いち早く1834年にはマンチェスターの教育状況を調査するために自ら委員会を組織し、教育調査に着手した。委員会に課せられた任務はマンチェスターにおける昼間学校、日曜学校、チャリティ学校そして幼児学校の状態を検査し、そこに在籍している子どもの人数や、そこで生徒が受けている知育の特徴や成果を報告するとともに、いわゆるケリー教育調査報告の分析をし、訂正をすることであった⁵。その実地調査に当たらせるために協会はひとりの調査員ウッド (John Ridall Wood) を雇った。彼は「まったく慈恵の先入観がなかったわけではないが、とらわれることのない公平な判断のできる人物であり⁶」、忍耐力とともにものごとをやり抜く優れた能力を併せ持っており、その後、協会の後援でなされた多くの都市教育調査を担当することになった。大都市の路地をひとつひとつ自らの足で調査し、情報をかき集めたが、その調査について自信をもってこう言い切っている。「私の信じるかぎりでは確かに、人の住んでいる路地はひとつ残らず探査された。」⁷ その仕事は詳細をきわめた

もので、学校に関する一連の政府報告書よりも信頼に足るものであった。とくに存続期間が短いとされたデйм・スクールについてはそうである。マンチェスターでの仕事は1835年には報告書としてまとめられ、1837年には第二版が発刊された。

マンチェスター統計協会は二つの教育調査方法を採用したが、ひとつの方法は調査地区の学校をもれなく探訪し、それについて報告することであった。もうひとつの方法は調査地区の家を一軒一軒訪ね歩き、そこに住んでいるすべての個人に関する情報を収集し、記録することであった。その調査には数カ月を要した場合が多かったようである⁸。当初、教育調査は回状に対する牧師や聖職者からの回答にもとづいたものが多かったようであるが、そのような方法の不備への反省から、調査員を雇い、より実地にもとづいた探査へと移行していったようである⁹。

学校の代表者らは、事実を引き出し収集するという統計協会の目的に対して理解があり、「少数の事例を除いて、質問には気持ちよく答えてくれたし、事実を引き出すためにのみ調査はなされているという確信以外には、訪問調査者からはどのような言質もとることはできなかった。¹⁰」だが、その仕事は骨の折れる、それも秘密を要するものであり、有能な調査員を探し出すことは必ずしも容易ではなかった¹¹。仮に最良の調査員が実地調査に当たったにしても、すべての情報を網羅できたわけではなかった。さらにまた、一部の地区や学校では調査そのものに対する不信感があり、情報提供を拒むなど、調査の障害となっていたようであり、調査はすべて円滑に運んだわけではなかった¹²。

このような教育調査の成果たるデータは、統計協会雑誌の誌面を次から次へと埋めていった。マンチェスターをはじめとするいくつかの教育調査報告書の概括についてはすでに触れておいたが¹³、そのような初期のものに較べると、統計は次第に調査項目も増やしており、統計処理も精緻さを増していったようである。紙幅の関係上、図表を載せることはできないが、たとえば、マンチェスター統計協会が実施したキングストン・アポン・ハルの調査報告

書には、以下のような項目についての図表が添付されている¹⁴。

表 I 人口の年齢構成と出身地

表 II 成人の職業

表 III 未成年の職業

表 IV 未成年・成人の学校教育

表 V 現在在学していない未成年者の離学年齢

表 VI 離学年齢時点の学力

表 VII 5歳未満、5歳から10歳までの子どもの学校教育と学力

表 VIII 10歳から21歳までの未成年者の学校教育と学力

表 IX 人口の年齢構成と学力

表 X 未成年者の出席の規則正しさ

表 XI 授業料

あるいは学校種毎の図表には、学校種毎の校数、教師数、生徒の年齢構成、生徒の親の職業、性別、登録者数、平均出席者数、離学の年齢とその要因、設立年、授業料、教授科目、クラス分け、時間割、教科書、教授方法、規律(体罰、課題を課す、閉じ込め、報奨)、教師の兼職、学歴、教職歴、所属する宗派など、こまかな事実が図表にまとめられている¹⁵。

ところで、学校種の調査でもっとも槍玉にあげられたのは、いわゆる「デーム・スクール (dame schools)」と蔑称で呼ばれた学校である。その典型的な描き方は次のようなものである。

「この項目のもとには、読み方のみ、それに裁縫が少し教えられているすべての学校が含まれている。これはもっとも数の多い学校種であり、一般にもっとも悲惨な状態にある。その多くは女性によって経営されているが、若干のものは年老いた男性によって経営され、この職業に対する彼らの唯一の資質は、他のあらゆる職業に不向きである、ということ

のようである。これらの教師の多くは、教師であると同時に、お店を開いていたり、裁縫、洗濯などの他の職業に従事していた。その結果、中断することなく生徒を教えることがまったく不可能となっている。親も教師もこれらの学校へ子どもたちを通わず際には、学ぶことを主な目的としていないようにみえる。彼らが言うには、子どもたちが学校へと通うのは、家庭で邪魔にならないためであり、学校で面倒をみてもらうためである。

これらの学校は全般に胸糞の悪くなるようなたいへん汚い部屋——しばしば狭いじめじめとした穴蔵、あるいは古い崩れかかった屋根裏部屋——にある。これらの学校のひとつでは11人の生徒がいたが、女教師の子どものひとりが麻疹でベッドに寝ていた。もうひとりの子どもは同じ部屋で、同じ病気で、数日前に亡くなった。通常通ってきている30人もの生徒が同じ病気に罹り、家で寝ていた。

他のある学校では生徒数は20人に達するが、すべての生徒は床に直に座っていた。部屋にはベンチや椅子もなく、どのような家具もなかった。男性教師が言うには、腰掛けを備えられるほどの授業料を徴収していない。学校が大きくなり、条件が改善されれば、いつかはそのような余裕ができることを望んでいる、ということであった。¹⁶

「これらのデイル・スクールに出席している子どもたちの人数は4,722人である。だが、本当に名に値する教育は受けていないように委員会には思えた。有用な教育の利益に与っているとみなされる人数を計算する際には、これらの子どもたちは度外視されるべきである。¹⁷」

多くは女性、あるいは年老いた男性が、身体を壊したために他の職業で生計を立てることができなかつたり、あるいは外に働きに出ることができないなどの理由で、糊口をしのぐために、やむを得ず生徒を集めて開いた学校、それがデイル・スクールである。教科書もまともになく、子どもたちが携えてくる本を教科書にして、主として読み方を教えている。だから、教師とは

名ばかりで、適性がとてもあるとは言えず、教える傍らで他の仕事をしている者もいる有様である。学校自体もきわめて劣悪な環境で、システムが整備されているわけでもなく、それに学校自体の存在が恒常的なものではなく、存続期間も不安定で短いものであった。親は授業料を払って子どもを通わせているが、子どもたちの教育へは関心を払っておらず、家庭での養育の責任を逃れるために、学校へと追いやっているだけである。それに、通学もきわめて不定期であり、期間も短いものであった。したがって、このような学校とは言えない場所での教育はほとんど評価に値しないことになる。報告書などではざっとこのように描かれているのが「デйм・スクール」である¹⁸。

教育統計——事実と歪曲

「労働者階級私営学校」について詳細な研究を公表したガードナーによれば、19世紀の初等学校数やその生徒数についてはこれまで多くのことが書かれてきた。だが、残念なことに、そのような研究は思うような成果を上げてこなかった¹⁹。というのも、そもそも労働者階級私営学校の存在そのものを特定するためのデータが弱点を抱えている上に、さらにはそれらのデータを解釈する際にある種の難しさが介在しているからである。たとえば、19世紀には「学校 (school)」や「生徒 (scholar)」ということば自体には明確な定義づけがなされていたわけではなく、きわめて茫漠としたものであった。したがって、統計家たちが「学校」あるいは「生徒」として記録していたものは、彼らが抱いていた「学校」や「生徒」の「理想像」に合致した限りのものであった。逆に、「現在は生徒ではない」あるいは「これまでも生徒でなかった子ども」として記録されていたものは、ことばの理想的定義にそぐわない人数であった。とすれば、19世紀には膨大な量の統計が産出されたにもかかわらず、19世紀の初等教育史に関する限り、学校や生徒数に関する統計的「事実」はそれ自体では何も語っていないことになる。ガードナーの立場からすれば、統計は一般に不完全で不安定なものとして生みだされたものであり、

このオリジナルな資料をその歴史的な脈のなかに置き直し検討することなく、素のままで用いることは、統計家たちの敷いたレールに何も考えずに乗ることであった²⁰。

ところで、そもそも統計協会に集っていた人たちは、党派的精神に駆られてその事業に邁進していたのではなく、彼ら自身は「事実」という非政治的真理を追究しているだけである、とみなしていた。ロンドン統計協会の「第4次報告書」は書き記している。

「適切に言われていることだが、現代の精神はことばを算術に突きつけるという明らかな傾向がある。つまり、単なる仮説や先験的な考えに対する不信が高まっており、社会科学の仕事では、正しく観察され、方法に則って分類された事実から正しく演繹された限りで、原理は応用できるという信念、そして、物質的・道徳的自然法則は経験の実証的事実を観察し、収集し、記録することによってのみ確証できるのだが、伝統的規則が変わらずに役立つためには、そのような自然法則に厳格に従わなくてはならない、という信念が広まっているのを見ないわけにはいかない。つまりは、統計的データは、地域であれ、全国であれ、経済と立法のすべての真のシステムの素材を形づくるべき、という信念が次第に高まっている。²¹」(傍点強調は原文ではイタリック。以下同様。)

「統計」は、数量化を用いて人口の実際の状態を研究するものであり、数値は事実を示すものであり、あたかも現実を引き写したように提示できる、と考えられた。だが、統計運動の歴史を描いたカリンによれば、協会によるそのような自己弁護はまともにとりあうべきではない。引用した最後の一節でも明らかなように、統計調査は社会改善施策への不可欠な地ならし的行為であることは、統計運動がくり返し謳った決まり文句であった。統計協会自体は「事実」の調査と収集を推し進めていったが、それは「真の意図を隠す理論」であった。再三再四にわたって統計家たちは調査に乗り出していったが、

主要な結論は調査以前にすでにわかりきっており、先験的理念に駆られたものであった。とくに「イデオロギー的な要請にいつそうあからさまに委ねられていたのは……教育調査であった。²²」というのも、協会の報告書は「あらゆる啓蒙的政府の至上課題である、義務遂行の最初のステップとして……公教育省」を組織することを勧告しており、それはけっして非政治的主張ではなかったからである²³。教育改革者たちは報告書や統計を自分たちの主張を支持するために用いており²⁴、統計はますます中央教育委員会、国家補助、教師養成学校を組織し、教職の地位を高めようとするキャンペーンへと従属させられていった。その公式的な主張にもかかわらず、統計協会は埋もれた未知の事実を掘り起こすことをめざしていたわけではない。彼らを突き動かしていたのは、事実の発見に左右されることのない至上の目的であり、統計はその手段であった。カリンが言うには、だからマンチェスター統計協会の教育調査の結果は、ほとんどの子どもがまともなフォーマルな教育をまったく享受していないわけではない、と解釈できたかもしれない。にもかかわらず、そのような解釈可能性は無視されていった²⁵。調査の真の目的は「事実」という手段でもって、人々に人口大衆の状態を知らしめることであった。政府による教育に対する補助立法を実現するのに、マンチェスタートリヴァプールのデйм・スクールに出席している子どもの人数の違いを知ることは必要なかった。結局のところ、フレッチャー (Joseph Fletcher) をはじめとする統計家たちはプロパガンダを「事実」として偽って提示したのであり、教育の目的は一つの階級を他の階級の価値システムへと転換することであった²⁶。

「統計」は「事実」を反映している、という主張にもかかわらず、その実、報告書のほとんどは統計を基礎にして書かれているわけではない。統計家や調査者が彼らの信念を吐露しているのは、数値には見えにくい他の部分である。「マンチェスター統計協会の信念がもっとも明らかになるのは報告書の質的部分である²⁷」とまでカリンは言い切っている。表面上は純粹に数量的な結論と見えるものに対して、価値判断を裏からそっと運び入れており、統計を

生み出す際の解釈的立場や視点がそこに隠されているということである。とすれば、私たちが報告書や統計を前にした際には、そのような価値判断や解釈的立場や視点がまずもって突きつけられていることになる。

歴史的「事実」の探求

教育に関しての報告書に目を通した人であれば誰もが気づくことだが、「もっとも明白な事実は、それらが中産階級の人たちで満ちあふれており、.... 労働者階級の子どものための学校教育について当惑している²⁸」姿である。中産階級の人々は日常において労働者階級の人たちと接することはまれであり、接することはあっても主人として接することが多く、教育に対する労働者階級の態度に戸惑い、自分たちが理解できないことがらを批判的に描いている。そして「その否定の傾向は、直接それを引用したり、剽窃したり、要約したり、言い換えてみたりする形で、アカデミックな世代を次々と介して、辿ることができる。このオリジナルな資料自体から抜き書きされた引用の多くでもって、この傾向は強固なものとなる。²⁹」こうして報告書や統計が語ったこと、そしてその背後に隠されていたイデオロギーが歴史家にも浸透し、代々受け継がれていくことになった。背後にある価値判断や視点を無批判的に受容し、書かれていることを素のまま受けとれば、たとえば、中産階級が提供した教育に対して、労働者階級の間には拒否的とも言える無関心な態度が広がっており、「教育の進歩」に対する大きな障害となっている、ということになる。

であるならば、この袋小路から抜け出す途はどこにあるのだろうか。ジョンソン (Richard Johnson) の一連の論考は 19 世紀教育史研究に一時代を画することになったが、彼は自らの研究が依拠した資料の読み方、分析について触れている。一言で言えば、その基本的立場は反映論であるが、報告書や統計という歴史的「事実」はイデオロギーによって歪曲されて表象されており、めざすべきは歴史的「事実」をその歪曲された形から救い出し、真正な

る形で提示することである。

「歴史上の出来事は媒介者を通して研究者に到達する。「一次」と称される資料は歴史的行為者の活動から直接に引き出される。これらの歴史的行為者—媒介者が社会においてどのように位置づけられているかが、彼らが提示している現実についての見解を形成してきた。個人がそれまでの人生の上で出会い学んできた経験群を介して、そして集団と個人のアイデンティティを介して、多かれ少なかれ制度化された役割を介して、このことは生じてきた。これらのことが典型的な仮定、利害、限界を彼らのヴィジョンにもたらしてきた。どのような資料も人間的な、すなわち、社会的、もう少し簡単に言えば通俗的には制度的なものに起源をもっている、このような傾向を免れることはできない。³⁰」(傍丸強調は引用者。以下同様。)したがって「一次媒介」という言いの方が「一次資料」という言い方よりも誤解が少ない。研究者(異なった社会における他の行為者—媒介者)の二次的媒介を加えれば、資料編集の距離計をもつこととなる。書籍の歴史は少なくとも過去の出来事あるいは状況から二重に離されている。³¹」

ヴェールによって「事実」は覆い隠されている。ではこの「事実」を覆うヴェールを取り払い、歪曲を正し、真正なる「事実」へと到達するためにはどのような手だてが必要なのだろうか。ジョンソンはこう言っている。「資料を扱う際の「批判的テクニク、配慮、誠実さ、腹蔵のなさ」によって歪曲は減らすことができる。明らかなことに、これらの手段によって再構成できる「事実」の領域がある。歴史家は意味や説明へと関心を抱くことで、歴史的行為者(彼ら自身を含む)は現実についての認識で違っており、それしばしば和解できないほど違っていることを理解するはずである。それぞれの見解は状況によっては正当であるかもしれないし、「正確さ」や「確実性」の実証的なテストにも動じないかもしれない。そうであるならば、より良い種

類の歴史は認識の違いを受け入れ、それを説明しようとするし、多様性を統合し、関係の上に固定することで、全体のありのままの形を再構築しようとする。こうして完全さが客観性の主要な試金石となる。³²

このような分析が実りある結果をもたらす対象のひとつとして、ジョンソンは教育に関する議会・枢密院報告書、いわゆるブルー・ボックスを挙げている。もちろん、これに統計協会の報告書を加えることも可能であろう。教育に関する報告書や統計を分析する際には、それらが作成された社会状況そして行為者が抱いていた先入観やイデオロギーがいかにして教育言説のなかに表象されていったか、ということへと関心は向けられていく。「誰の、そして何のためのブルー・ボックスか。それらは教育問題について誰の見解を描いているのか。どの時点で不十分さゆえに間違った方向へと導かれたのか。それらは一連の教育関係および社会関係の一面のみを示している。もしそうであるならば、無批判的な使用は歴史的な大きな先入観をいっそう増長させ、技術的不正確さが涵養するものよりもいっそう大きく増長させる。³³

ならば、途は二つあることになる。私たちが利用することのできる数少ない公的な報告書や統計から、できる限り歴史的行為者の偏見や先入観を取り払い、「事実」を探求する途がひとつであり、もうひとつは新しい資料を掘り出すことである。

労働者階級文化

「事実」を探求する途は、報告書や統計がそっと押し付けてくる視角あるいはものの見方を自明視することなく、報告書や統計の隙間からときおり顔を覗かせる不安定さ、敵意ある偏見にもかかわらず、そのほとんどでちよろちよろと流れている、不一致や内部の矛盾へと果敢に斬り込むことである。そういうものを積極的に追い求めないかぎり、労働者階級による教育に対する否定的論調が氾濫し「事実」が見逃されてしまう³⁴。

教育に対する労働者階級の態度は貧困と無関心へと帰せられることが多

い。だが、たとえば、無関心へと還元されがちな学校教育に対する親の態度であるが、報告書や統計の隙間から顔を覗かせる矛盾を辿っていくと、彼らの態度はきわめて功利的であることがわかる。実際に多くの子どもたちは読み方を身につけると学校を辞めてしまう。裏を返せば、親は自分たちが高く評価した内容を学校から躊躇せずに取り出し、学校の規則やそこで教え込まれることを自分たちにはそぐわないとみなし、できる限り避けようとしていた。その行動には道徳・宗教教育に対する強い嫌悪感を見てとれる。二大協会系の公営学校に較べると、私営学校は授業料が高く、私営学校に取って代わろうとする公営学校による攻勢にもかかわらず、しぶとく存続した。そのひとつの大きな理由は、授業料によって維持される私営学校は親の統制のもとにあったからである。リベラルな歴史的解釈の流れのなかでは、学校教育に対する敵意と無関心を、教育あるいは学習自体に対する反対を表現したものであり、近代的公教育の進歩を阻害するものであり、克服されるべき障害として位置づけてきた。このような非難の背後では、民衆の「ために」供せられた恩恵的とも言うべき教育施設が漸進的に整備されてゆく過程が寿がれてゆく。

私たちがこれまで労働者階級私営学校をうまくすくい取れなかったのは、理念やイデオロギーによって眼が曇らされてしまい、歴史的「事実」を認識できなくなってしまった、というわけである。だから、ジョンソン言うところの第二次的媒介者を介して私たちにもたらされた視点をずらさないかぎり、歴史的「事実」は見えてこないことになる。それでは先験的な理念やイデオロギーとはもう少し具体的に言うところのどのようなものなのだろうか。たとえば、それは労働者階級は受動的であり、統制された教育形態のみが「教育」あるいは「学校」の名に値するという考えである。学習は学校でなされる、という考え方自体は近代的なものであり、イングランドではすべての子どもを学校へ通わせるという野望は19世紀のものであった。したがって、学校と教育を同一視することは重要な歴史的発展を偽ることである。すなわち、自生的、固有の、偶然の学習形態を、監督され、統制され、型にはめられた学

習形態へと転換するという流れを自明視することである。だから、そのような視点を転換したり、ずらさない限り、あるいは歴史的進歩を立ち止まって考えない限り、19世紀の統計家や報告者がデイトン・スクールについて述べた否定的見解をそのままの形で受け継ぐことになる³⁵。

そもそも労働者階級私営学校についての統計はけっして多くはなかった。というよりも、教師たちは公的な調査に応じることによって得るものがないばかりか、かえってリスクが大きいことをわきまえていたし、労働者階級私営学校は他のさまざまな理由から精緻な数量化にはなじまなかった。そうできると考えるのは非現実的でさえもあった。調査者に受け入れられる教育要素がないと、そのような場所はしばしば無視され、学校としては数え入れられなかった。だからこのような調査をそのまま受けとると、統計のないところにはまったく労働者階級私営学校はない、と考えがちである。だが、労働者階級私営学校は突然新たに発見されたわけではなかった。「この伝統のなかにある学校は新しい歴史的発見のようであるが、突然に地中から発掘されたわけではない。これまでつねに歴史的学問の面前にあった。未知なる秘密の労働者階級の脈脈というものはなかった。労働者階級私営学校はそのようなものとして認知されたり、研究されたりはしてこなかったが、長い間ある流儀で知られていた。すべての政治的色彩の強い歴史家からは無視されてきた。³⁶」

ある意味で、19世紀の統計実証主義と初等公教育制度はその起源を同じ道徳文化にもっていた。報告書も統計も、そして「デイトン・スクール」も基本的に「文化的構築物」であり、「事実」がストレートに反映したものではなかったし、「現実」の正確な反映でもなかった。それらは公教育制度の発展をめざし、それを主導する人たち、あるいはその影響を強く受けた人たちによって書かれたものである。言いかえれば、「専門家」の価値判断と偏見がそこには持ち込まれていたのである。だからと言って、報告書や統計には価値がないということではない。歴史家に課された仕事は文化的構築物がどのような影響のもとで、どのようなプロセスを経て生産されたか、という点にメスを入

れることで、それを修正し、逆にその価値を高めなくてはならない。そのようなプロセスを踏まない限り、公的な報告書や統計のなかに持ち込まれたイデオロギーが支配し続けることになってしまう。

このような批判的アプローチをもう一步進めると、そこには「労働者階級文化」が姿を現わしてくる。もう少し敷衍すれば、労働者階級文化が厳然と存在し、公式的に述べられた学校の進歩という見解に対するオルタナティブを提供していた、と主張される。だから、フォーマルで統制的な教育と出会った際に、固有の社会的・政治的構造に依拠する労働者階級文化はそれとどのように切り結んだか、が問題となる。ここで求められていることは、教育過程のより生来の観点を表現している資料からそのオルタナティブを救い出すことである。そのためには労働者階級の自伝類やラディカルな新聞などが新たな資料として発掘されていく³⁷。この文化へ注目することで、どのような物語が紡ぎだされ、それはどのような批判的射程をもち得たのかは大きな問題であるが、また違う流れのなかで論じなければならないことを、ここでは指摘するにとどめよう。

統治性 — 統治と知

世界はそれ固有の境界と特質をもった所与のものとして、自ずと統治の前に立ち現れるわけではない。統治するためにはあるマトリックスで世界を分かちることが必要である³⁸。人口、家族、子ども、あるいは自己の統治は、ことばや統計や図表を介してある種の境界と特質を持った理解可能な領域として、それらを表象することによって初めて可能となる。まずもって、統治するためには統治の対象領域あるいは問題に関する知識が前提となっており、またそれが要求されている。

また、統治のプログラムは個人であれ、階級であれ、統治主体の意志が具現化したものではない。私たちの関心から言えば、教育あるいは学校という領域を統治するには、その領域の内在的法則と条件が明らかとなり、意識的

な計算ができるような形式で表象されることが必要である。このことによって、教育や学校は思考可能なものとなり、ひいては統治可能なものとなる³⁹。ここに介在しているのは「意志」や「意識」ではない。偶然に満たされた世界を思考可能なものにし、統治可能にするためには、統治の対象領域についての知識を生み出す一種の知的装置が必要であった。

イギリスとフランスでは、19世紀初めに古い「政治算術」が近代的「統計」に取って代わられた。「政治算術」は「ポリス」的統治形態の技術であったが、内在的法則と条件をもっている領域として、領土やその住民を統治することをめざしたもので、そのためには領土やその住民は知られなければならなかった。「政治算術」はまた絶対主義国家の中央集権化された官僚制度と緊密に結びついており、それは国家の独占的秘密であった。

対照的に、統計は「リベラリズム」的統治形態の技術であり、19世紀イギリスの統計協会の活動に典型的に見られるように、近代的国家の外部の人たち、すなわち医者や聖職者たちによって先導された。リベラルな国家もまた統治の対象とした人々を知らなければならなかった。統計家たちがくり返し主張したことは、問題が改善されるべきであり、経済が発展し、人々の状態が改善され、進歩するべきならば、賢明なる統治は統治されるべき人やものごとについての統計知識に依拠しなくてはならない、ということであり、統治と知との関係をよりリベラルな形で展開した。もう少し言えば、近代的統計は「市民社会」について法則を明らかにしようとするものであり、「市民社会」そのものを構築するのを手助けした、とも言えよう。こうして統計は統治に必須なものであり、知を生み出すためのキーとなった⁴⁰。

イギリスに則して見れば、1800年に国勢調査が開始され、次第に人口についての知識が累積され、大規模に利用することが可能となった。また、1836年の出生、死亡、結婚登録は「市民社会」の法則を明らかにする試みのなかで大きな一歩となった。さらに、1841年以降、国勢調査は精緻になり、人口についてのさまざまな情報事項を照らし合わせることができるようになった。ガードナーの「労働者階級私営学校」研究が依拠した資料のひとつは、この

1841年の国勢調査であった。統計は統治のための問題構成デバイスであり、その統計が明らかにした「事実」が、統治を批判するために用いられたことはきわめて興味あることである。

よく知られていることだが、19世紀の統治プロジェクトは道徳的地誌の編み上げによって、言いかえれば、問題を抱えていたり、危険を及ぼすおそれのある階層について、統計にもとづいた地図を作製することによって、その発動の前提条件がつくられた。そのプロジェクトの一環として教育や学校データも収集されたわけである。統治は教育や学校に関わる現象を知識に変えるために、調査に膨大な人と労働を投入した。すなわち議会による教育調査や勅任視学官の果てしない労働、そしてまた統計運動の調査・報告活動はそれを表している。さまざまな地区や学校、そしてそこで営まれている教育のありようを調べ上げるために、街路をくまなく探訪し、一軒一軒の家を訪れ、居住者すべてを調査し、広くデータを収集していった。このことを介して、教育や学校はマトリックスによって境界づけられた図表などの刻記デバイスで表象され、統治のために可視化されるに至った。したがって、これは単にものごとを見るということではない。ことばや統計で刻記することを媒介として、教育や学校は分節化され、マトリックスによって比較可能になり、思考可能な形態になる。顕著な特徴が見つけれ、顕著でない特徴は見えないようにされる⁴¹。こうして、現実は無動かすことができるものとなり、統治可能な形態になる。一種の環境教育論がここに出現する素地ができたことになる。

それでは教育統計や報告書は具体的にいったい何を表象していたのだろうか。大量の教育・学校データを前にして、いったい何をどのように考えることを強いられているのだろうか。政府議会報告書、統計協会報告書、勅任視学官報告書にはさまざまな事項、マトリックスによって境界づけられた図表が溢れている。その一端にはすでに触れておいた。そこからどのような手続きがとられたのだろうか。統計協会の報告書からいくつかを見てみよう。

ロンドン統計協会はウェストミンスター・セント・ジョンとセント・マー

ガレットの両教区の調査報告書を提出したが、それによれば教区の人口は1821年の国勢調査時点では人口は39,222人であり、1831年には47,992人であった。それ以降人口が同じような割合で増加したとすれば、調査時点での住民数は54,131人に達すると推定されている。さらに各年齢層が1821年に確認されたものと同じ割合であるという仮定にたてば、5歳から15歳の推定人口は8,873人となる。また同年齢層の子どものうち、1837年から38年の冬に学校で何らかの教育を受けていた人数は4,626人であった。とすると、未就学の人数は残りの4,247人、47.8%となる⁴²。

バーミンガム統計協会もほぼ同じような手続きでもってその教育調査報告書を作成し、教育を構成している。1821年と31年の国勢調査にしたがって、人口の1/4が5歳から15歳の子どもであり、調査時点(1838年)では180,000人と推定される住民のうち、21,824人のみは何らかの教育を受けていた一方、残りの23,176人が何ら教育を受けていなかったことになる⁴³。

「子どもは(雇用できない9歳未満の)受け身の人口と(9歳から13歳までの)積極的な人口から構成されているが、その子ども数を知ることは重要である。というのも、前者からは学校へ通うべき人数を推定できるし、学校についての知識や通学している生徒数から、初期教育がないがしろにされている子ども数を確定できるであろう。このことを確定したのち、その原因が親の無能力あるいは嫌気から生じているのか、学校施設の不足から生じているのか、あるいは他の理由によるのかを見つけだし、その改善策を講じることはむずかしくない。また、私たちは家計に寄与している人数やその金額を知ることができる。野蛮な人口を養っていく費用はそれにならざる不快が伴うが、統計がその費用を示し、経験がそれを確認する。よく言われることだが、罰を科すことの費用は、結局は教育の費用よりもいっそう高いものとなる。⁴⁴」

年齢のマトリックスを用いることによって通学すべき子ども数が確定でき、その年齢層から通学している人数、通学していない人数、あるいは学校の状態から教育状態が構成されてゆく。それは大きくは産業、人口、はたま

た家族の貧困、収入などさまざまなマトリックスによって境界づけられ、比較され、データは積み上げられてゆく。言っておかなければならないことは、年齢や職業によって人口が構成されていくのは、出生から死亡までの調査がすでになされていたから、すなわち、国勢調査をはじめとする各種の統治技術がすでに作動していたから可能だったのである。

統計協会の調査はもちろん教育調査に限定されるものではなく、調査地区や人口に関するあらゆる「事実」を網羅することであった。加えて調査は地区や人口にマトリックスをおおいかぶせ実施され、道徳統計は貧困や犯罪をはじめとするさまざまな調査項目との連関で教育を構成するものであった。ニューキャッスルの教育協会委員会はこう記している。

「これまで述べてきたことを結論づけるにあたって、その部門(英国協会統計部門)に対してたいへんたくさんの一般的な情報をもたらしたことで、そしてまた厳格には教育統計には関連しない事項を導入したことをまずご容赦願いたい。私たちの調査は当初は教育統計に限られていたのだが、調査の過程で、さらなる価値ある情報を収集する機会がたいへん容易に得られたので、..... 最大限に活用できたわけです。これまで述べた地区の一般的状態の調査はそれほど詳細ではなかったもので、私たちは問題点を数値によって表わすことはできない。項目自体が正確な表の形をつくるようにすることは困難な性格のものであるが、述べようとめざした問題の正確な印象を伝えるのに役立つば、情報も無駄ではないと考えられる。⁴⁵⁾」

「教育や学校はいかにあるべきか」と関連づけて、現在の教育や学校の態様を測り、今ある状態から望ましい状態へと転換させる方法を発明するために、学校数や生徒数を数え上げ、国勢調査の人口数と較べ、さまざまな参照事項たるマトリックスに則して分類し刻記することは、そこに当然のことながら、標準を生じさせたであろう。次にはこのプロセスとは逆に、そのような標準

にしたがって現実を解釈するように強いることになる。だから知識そして刻記はものごとを中立的に記録する機能の結果ではない。それ自体現実に働きかけるひとつのデバイスである。このようなメカニズムはリベラリズムと結びついた統治体制における革新であった⁴⁶。

繰り返しになるが、ことばや数値は統治のプログラムにとって二義的なものではなく、ことばや数値による刻記は遠くから統治するためのひとつの形態である。ことばや数値によって構成されたレジームの内部でのみ統治は可能となった。なぜゆえことばや統計へとこだわるのだろうか。ここでの関心である教育や学校に則して言えば、それは教育や学校が実際に何であったか、そしてなぜそうであったかを特徴づけるためではない。教育や学校を提供しようとした人々が意図したもの、彼らの背後にあった隠された階級利害がどのようなものであったかを探り出すために、イデオロギーを解釈し、彼らが述べたことの裏面を探ろうとしているわけではない。というよりも、問題は人々が教育や学校についてどのように問うたか、そして統治するためにすべきことをどのようにすることができるのか、へと向かっている。だから、ことばや数値による刻記は所与の現実を反映するのではなく、それを作りあげるものである。問題は、事実や現実がどのようなになっているのか、ここでは教育や学校がどのようなになっているのか、ということではなく、私たちの文化的カテゴリーを介してはじめて事実や現実を理解できるということである。労働者階級私営学校が存在したか否かというよりも、どのような力の発動によって、どのような技術デバイスを介して問題構成されたのか、そのことがここで論じるべきことである。「統治の分析は知識、あるいは真理の体制に関係している。言いかえれば、歴史的エピステモロジー、すなわち「ある時期に何を知識とし、あるカテゴリー、分類、関係、アイデンティティに特徴をもたせるものを生産することを許す、エピステモロジー的領域」の再構築ということである。⁴⁷」

このような系譜学立場にしたがえば、前に見たネオ・マルキストらの主張は「主体中心主義」として批判されることになる。そもそも学校制度は主体

の内在的能力からではなく、国家形成とそれにかかわる政治的ならびに知的テクノロジーから生みだされたものである。ところが、ネオ・マルキストラは「学校制度は、自然によって人間主体に与えられた、あるいは歴史によって人間に約束された理性的そして道徳的能力の「有機的」手段であり、あるいはそうなるべきものである、と主張する点で、主体中心(subject-centred)である。⁴⁸」ネオ・マルキストラの「願望」をそこに読み込むことができるが、系譜学の立場からすれば貧困や犯罪そして不道徳などの労働者階級の社会問題が構成され、それを矯正する手段として国家による学校教育が構成されたのは、階級的な意図とは無関係な「道徳統計」を通してであった。

「ケイシャトルワースや同様の立場にあるそのほかの者が政治的認識と行動の新しい対象へとアクセスできたのは、社会統計や社会調査のテクノロジーのおかげである。この対象となったものは、統計的に決定されたノルムあるいは生活水準のまわりに組織された、なんらかの社会的問題性質と行動をかかえている人口である。

こうして統治の新しい政治的ならびに知的テクノロジーは国民人口の日々の暮らしや労働を政治的計算や行政的関与へと開いていく形で識別できるようにした。このようなテクニカルで政治的な環境のなかで、国家管理の初等教育が学校教育の手段として考えられるようになった。⁴⁹」とすれば、国家による学校教育は主体の知的・道徳的能力や階級利害、イデオロギーの所産ではない。個々の主体の理性的あるいは道徳的能力から生じたものではなく、あるいはそのような能力に対してイデオロギーのヴェールをかぶせ、それを歪曲するような階級利害から生じたわけでもない。だから統治が初めて国民教育へと関心を示したのは普遍的にせよ社会的に規定されたものであれ、「意識」というような表面においてではなかった。査察調査と報告書や統計という知的な刻記テクノロジーの展開によって形成された表面であった、と言えよう。

いささか駆け足気味で、統治のデバイスとしての統計やことばについて触れてきたが、系譜学で批判された「主体」は、教育あるいは学校とかかわっ

て、どのような力そしてデバイスのもとで生みだされたか、という問題は残されている。

- 1 「大衆の肉体的状態、習慣そして身につけている知識についての情報は、慈悲の機関によってその状態を改善したり、あるいは刑法によってその乱暴さを抑えるための健全な計画を立てるために不可欠なものである。このようなことを考えに入れなかったことが、立法上で多くの粗野で不適当な試みの原因となってきたのであり、それは庶民の状態や欲しているものについて生半可な知識しか持っていないことに原因がある。..... 他方では、大きな町の下層階層は、換気の悪いそして排水がうまくなされない街路のじめじめとした穴蔵に住んでいるが、その状態はしばしば劣悪であるので、広く知れ渡れば、苦しみを緩和するためにいっそう精力的な努力がなされるであろうし、なんらかの手段が見つけれられるだろう。だが、豊かな資産が提供するあらゆる慰安を常に楽しんでおり、彼ら自身の町ではあるが、ほとんど訪れたこともない不健康な地域で何が起きているのかについて、たとえ持っていたにしても、たいへん不十分な知識しか持っていない人々には、その苦しみの激しさははっきりと切実に自覚できるものではない。したがって、社会の富裕な階層に対して、困窮し苦しんでいる大多数の隣人の真の状態を示し、一方には同情を、他方には感謝と喜びの気持ちをよびおこそうとする試みは、両者にとって有益なものとなるであろう。」(Statistics of the Population in the Parish of Trevethin (Pontypool) and at the Neighbouring Works of Blaenavon in Monmouthshire, chiefly employed in the Iron Trade, and inhabiting part of the District recently distributed, By G. S. Kenrick, Esq., of the Varteg Iron Works, *JSSL*, 1840, Vol. III, pp.366-7.)
- 2 M. J. Cullen, *The Statistical Movement in Early Victorian Britain*, 1975, p.14.
- 3 *Ibid.*
- 4 *Ibid.*, p.65.たとえば、マンチェスター統計協会是这样指摘している。マンチェスターは142,000人の人口を擁しているが、調査では幼児学校1校、日曜学校10校、昼間学校176校、その生徒数10,611名が見落とされている一方、存在していない日曜学校3校、生徒数1,590名、さらに3校、生徒数375名が二重に数えられている。結局、181校、8,646名が誤って数えられており、さらにデイル・スクール8校が幼児学校として報告されている (*Report of a Committee of the Manchester Statistical Society on the State of Education in the Borough of Manchester, in 1834* (London, 1835, p.6).)
- 5 *Ibid.*, p.3.
- 6 Richard Johnson, *Elementary Education: The Education of the Poorer Classes*, in Gillian Sutherland and others, *Education in Britain*, 1977, p.17.
- 7 *Report from the Select Committee of Education of the Poorer Classes in England and Wales*, 1838, q. 1228.
- 8 たとえば、キングストン・アポン・ハルでは3カ月にわたって調査が実施されている (*Report on the State of Education in the Borough of Kingston-upon-Hull, By the Manchester Statistical Society, JSSL*, 1841, Vol. IV, p.156.)。
- 9 たとえば、1836年にプリストルの英国科学振興協会の統計部門を前にして、民

衆教育の状態についての短い報告がなされたが、当時は利用できる方法が他になかったため、それは回状に対する牧師や聖職者からの回答にもとづいたものであり、多くの不備があった。それ以来、プリストル統計協会は委員会を任命し、教育に関して地域住民の状態をより注意深く調査したが、その任に当たったのは、労働者階級の状態について調査に当たったのと同じ調査員であり、彼が直接に学校を訪ね、教師の話聞き、ほぼ6カ月かけて調査を遂行した(Statistics of Education in Bristol. By a Committee of the Statistical Society of Bristol [Read before the Statistical Section of the British Association, August 2nd. 1841] *JSSL* 1841, Vol. IV, p.250.)。マンチェスター統計協会は、サルフォード郊外のペンドルトンの家々を一軒一軒探訪し、4カ月かけて学校教育の調査を行った(Report of a Committee of the Manchester Statistical Society, on the State of Education in the Township of Pendleton, 1838, *JSSL*, 1839, Vol. II, p. 65.)。バーミンガム統計協会は教育状態を調査するために、1838年の1月に学校訪問を開始し、4月に終了している。調査の精度をできるかぎり担保するためにあらゆる手段が採用され、あらゆる種類の学校を探し出して調査するために、街路や袋小路はひとつ残らず探査された。報告書はそのような調査にもとづいたものであり、情報は少数の例外を除いて、調査者がじかに学校を視察した結果であり、あるいは学校の所有者あるいは代表者から引き出されたものである(Report on the State of Education in Birmingham. By the Birmingham Statistical Society for the Improvement of Education, *JSSL*, 1840, Vol. III, p.25.)。

- 10 Third Report of a Committee of the Statistical Society of London, *JSSL*, 1839, Vol. I, p.458.
- 11 「現在提出されている報告は不正確ではないし、申し分ないほど完璧である、と委員会は主張するつもりはない。だが、委員会が確信しているのは、調査員はあらゆる点で報告を完全なものにしようとして、いかなる労も惜しまなかったし、偏ることのない公正な調査員によるパーソナルな調査によって(この場合のように)得られた報告のように、この種の概括的な結果は人々の信頼を勝ち得ることはない、ということである。反対論を未然に防ぎ、最初の報告での欠陥・不足を補充するためには、くり返し訪ねなくてはならなかったが、ほとんどの学校に関しては、欲しい情報は難なく手に入れることができた。」(Statistics of Education in Bristol. By a Committee of the Statistical Society of Bristol..... *JSSL*, 1841, Vol. IV, p.250.)
- 12 Report of the Education Committee of the Statistical Society of London on the Borough of Finsbury [Read before the Statistical Society of London, 16th January, 1843], *JSSL*, 1843, Vol. VI, p.26, Statistics of the Population in the Parish of Trevethin....., *JSSL*, 1840, Vol. III, p.368, Report on the State of Education in the Borough of Kingston-upon-Hull, By the Manchester Statistical Society, *JSSL*, 1841, Vol. IV, p.156, Statistics of Education in Bristol....., *JSSL*, 1841, Vol. IV, p.250.
- 13 *Report of a Committee of the Manchester Statistical Society on the State of Education.....*, p.21, 拙稿「19世紀前半の統計協会と勅任視学官による教育調査」小樽商科大学『人文研究』第114輯参照。
- 14 Report on the State of Education in the Borough of Kingston-upon-Hull, By the Manchester Statistical Society, *JSSL*, 1841, Vol. IV, p.158.

- 15 Second Report of a Committee of the Statistical Society of London, *JSSL*, 1839, Vol. I, pp.193-, Third Report of a Committee of the Statistical Society of London, *JSSL*, 1839, Vol. I, pp.449-, Report of a Committee of the Manchester Statistical Society on the State of Education in the County of Rutland, in the year 1838, *JSSL*, 1839, Vol. II, pp.303-, Report on the State of Education in Birmingham. By the Birmingham Statistical Society for the Improvement of Education, *JSSL*, 1840, Vol III, pp.25-, Statistics of Education in Bristol....., *JSSL*, 1841, Vol. IV, pp.250-, Report of the Education Committee of the Statistical Society of London on the Borough of Finsbury [Read before the Statistical Society of London, 16th January, 1843], *JSSL*, 1843, Vol. VI, pp.28-.
- 16 *Report of a Committee of the Manchester Statistical Society on the State of Education in the Borough of Manchester, in 1834* (London, 1835, p.7.)
- 17 *Ibid.*, p.9.
- 18 経営者あるいは教師の質の悪さについては、たとえば Report of the Education Committee of the Statistical Society of London on the Borough of Finsbury....., *JSSL*, 1843, Vol. VI, p.29 参照。宗教・道徳教育がないがしろにされていることについては Second Report of a Committee of the Statistical Society of London, *JSSL*, 1839, Vol. I, p.195, Report on the State of Education in Birmingham. By the Birmingham Statistical Society for the Improvement of Education, *JSSL*, 1840, Vol III, pp.30-, On the State of Education in the Inner Ward of St. George's Parish, Hanover Square. By the Rev. E. Wyatt Edgell. (The Inquiry was made by the Writer, that its results might accompany the preceding), *JSSL*, 1843, Vol. VI, p.26 参照。生徒の出席の不安定さについては Second Report of a Committee of the Statistical Society of London, *JSSL*, 1839, Vol. I, pp.195-6 参照。クラス分けがなされていないことについては Second Report of a Committee of the Statistical Society of London, *JSSL*, 1839, Vol. I, p.196 参照。教師の兼業については Second Report of a Committee of the Statistical Society of London, *JSSL*, 1839, Vol. I, p.196 参照。教職に就いた理由については Third Report of a Committee of the Statistical Society of London, *JSSL*, 1839, Vol. I, p.452 参照。学校の存続期間が短いことについては Report of a Committee of the Manchester Statistical Society, on the State of Education in the Township of Pendleton, 1838, *JSSL*, 1839, Vol. II, p.67, Report on the State of Education in Birmingham....., *JSSL*, 1840, Vol III, pp.30-参照。Fifth Report and Summary of the Education Committee of the Statistical Society of London [Read before the Statistical Society of London, 19th June, 1843], *JSSL*, 1843, Vol. VI, p.214 では教職訓練の有無, 教職歴等々について詳述され, 要約された表が載せられている。
- 19 「デйм・スクール」の経営者は自らが経営する教育機関を「デйм・スクール」と名づけていたわけではなく、そのような名称は統計家や調査者がつけたものである。ガードナーは「デйм・スクール」という名称は中産階級のイデオロギーにまみれたものであり、そのような名称をそのまま無批判的に使用することは統計家や調査者の視点からしか教育の態様を見られなくするものであり、そこから救い出すために「労働者階級私営学校」という名称を提唱している (Phil Gardner, *The Lost Elementary Schools of Victorian England*, 1984)。

- 20 *Ibid.*, p.46.
- 21 Fourth Annual Report of the Council of the Statistical Society of London, *JSSL*, Vol. I, 1839, p.8.
- 22 M. J. Cullen, *The Statistical Movement in Early Victorian Britain*, p.112.
- 23 *Ibid.*, pp.114, 133.
- 24 B. F. Duppa, Analysis of the Reports of the Manchester Statistical Society....., *First Publication of the Central Society of Education*, 1837.
- 25 M. J. Cullen, *op.cit.*, p.133.
- 26 *Ibid.*, p.144.
- 27 *Ibid.*, p.112.
- 28 R. Johnson, *op.cit.*, p.8. 「ほとんどの証言者は..... 生活や文化のほとんどあらゆる側面——収入, 教育, 住居, 衣服, 言語, 家庭環境——において労働者階級から引き離されている。理解するにはメンタルな翻訳という稀有な才能を必要とした。」彼らは主人として, 文字通り富者として, 社会的下等なものとしての労働者階級に出会った。出会いが偶然のものでない場合は, 仕事あるいは慈悲的な活動のなかで生じた。「このことによって, 観察者は他の文化の不透明さを洞察することができたかもしれない。報告をした人たちのほとんどは貧民の「専門的」調査者ではなかった。偏在する社会学者に当時匹敵したのは, 統計協会のエキスパートと補助員であった。これらの人たちは一般に専門職であり, 多くは牧師であった。貧民についての知識は彼らが行なった仕事から形づくられた。..... 役割と階級が考え方を形づくったばかりではなく, 観察された人々についての情報をも形づくったかもしれない。..... メイヒューが示したような聴取能力は稀有なものであった。」(*Ibid.*, p.12.)
- 29 Phil Gardner, *op.cit.*, p.6.
- 30 Richard Johnson, *op.cit.*, p.5.
- 31 *Ibid.*
- 32 *Ibid.*, pp.5-6.
- 33 *Ibid.*, p.6.
- 34 Phil Gardner, *op.cit.*, p.5.
- 35 Richard Johnson, *op.cit.*, p.15.
- 36 Phil Gardner, *op.cit.*, p.4.
- 37 David Vincent, *Bread, Knowledge and Freedom*, 1981 (川北稔・松浦京子訳『パンと知識と解放と』岩波書店, 1991年), J. Burnett(ed.), *Destiny Obscure*, 1982.
- 38 Nikolas Rose, *Power of Freedom*, 1999, p.31
- 39 Nikolas Rose and Peter Miller, Political power beyond the State: problematics of government, *British Journal of Sociology* 43-2, p.182.
- 40 Nikolas Rose, *op.cit.*, p.24.
- 41 *Ibid.*, p.36.
- 42 Second Report of a Committee of the Statistical Society of London, appointed to enquire into the State of Education in Westminster, *JSSL*, 1839, Vol. I, p.193.
- 43 Report on the State of Education in Birmingham. By the Birmingham Statistical Society for the Improvement of Education, *JSSL*, 1840, Vol III, p.25. 他にもほぼ同様な手続きで処理がなされている (Educational, Criminal, and

- Social Statistics of Newcastle-upon-Tyne. *JSSL*, 1839, Vol. I, pp.355-).
- 44 Report upon the Condition of the Town of Leeds and of its Inhabitants. By a Statistical Committee of the Town Council. October 1839, *JSSL*, 1839, Vol. II, pp.410-1.
 - 45 Educational, Criminal, and Social Statistics of Newcastle-upon-Tyne. Drawn up by William Cargill, Esq., and a Committee of the Educational Society of Newcastle. *JSSL*, 1839, Vol. I, p.361.
 - 46 Nikolas Rose and Peter Miller, *op.cit.*, pp.185, 187.
 - 47 Nikolas Rose, *op.cit.*, p.29.
 - 48 Ian Hunter, The Pastoral Bureaucracy; towards a less principled understanding of state schooling, in Denise Meredyth and Deborah Tyler (eds.), *Child and Citizen: genealogies of schooling and subjectivity*, 1993, p.242.
 - 49 *Ibid.*, pp.250-1.